はじめての万葉集【vol.93】

日本に現存する最古の和歌集「万葉集」をわかりやすくご紹介します

橘の賀歌

この歌には「橘宿禰奈良麻呂の、詔に応へたる歌一首」という題詞があります。橘諸兄の子・奈良麻呂が、聖武天皇（あるいは元正上皇）のお言葉に応じて詠んだ歌です。この歌の意味を考えるには、一つ前の歌から見ておく必要があります。

橘は　実さへ花さへ　その葉さへ
枝に霜降れど　いや常葉の樹

（橘は実までも花までも輝き、その葉まで枝に霜が降りてもますます常緑である樹よ。／一〇〇九番歌）

ご存じの方もおられると思います。私自身、リズムがよくて好きな歌の一つです。ものすごく橘をほめたたえていますね。題詞に「冬十一月に、左大弁葛城王等に姓橘氏を賜ひし時の御製歌一首」とある通り、天平八（七三六）年十一月に葛城王（橘諸兄）が橘の姓を賜った時の歌です。左注には元正上皇・聖武天皇・光明皇后が宴席でそれぞれ「橘を賀く歌」を作った、とあり、一〇〇九番歌の作者は一説に元正上皇かといわれています。橘諸兄は敏達天皇の子孫ですが、母方の橘姓を願い出て臣籍に降りました。その賜姓を祝うため、このように橘が永遠であることが歌われています。

記紀にも、垂仁天皇の時代にタヂマモリが常世国から橘を持ち帰ったという伝えがあります。橘は「時じくの香菓」とも呼ばれ、時を定めず（いつも）よい香のする輝かしい果実だとされていました。

さて、一〇〇九番歌では「霜」が、一〇一〇番歌では「雪」が詠まれます。これは、和銅元（七〇八）年、諸兄の母県犬養三千代が橘姓を称した際の元明天皇の勅に「（橘の）柯は霜雪を凌いで繁茂る」とあるのをふまえたものです。「地に落ちない」（一〇一〇番歌）のは橘のことで、苦難があっても橘氏の力が衰えないことを自ら表明しています。この時奈良麻呂は十五、六歳。この堂々たる歌いぶり、実際は諸兄が作った歌ではないかという説があります。

この翌年、疫病（天然痘）の流行により藤原四子が次々に亡くなり、諸兄が政権を握ります。橘の名にふさわしく輝き、正一位にまで昇りました。

（本文　万葉文化館　阪口由佳）

奥山の真木の葉凌ぎ降る雪の降りは益すとも地に落ちめやも

橘奈良麻呂　巻六（一〇一〇番歌）

訳　奥山の真木の葉をおし靡かせて降る雪が、いっそう降りしきるとも、橘の実が地に落ちることなどありましょうか。

万葉ちゃんのつぶやき

和歌や作者などに関連するものを紹介するよ！

万葉ちゃん

奈良と橘

橘は別名「大和橘」とも呼ばれ、日本固有の柑橘です。万葉集で数多く詠まれたほか、古事記、日本書紀では垂仁天皇が多遅麻毛理（田道間守）に命じて探させた不老不死の霊薬として登場するなど、奈良に大変ゆかりがあります。

県産業振興総合センターでは、橘の花から酵母の分離に成功しており、現在、奈良県独自の「橘花酵母」を使ったビールの開発に取り組んでいます。

問県産業振興総合センター
☎0742-33-0863
www.pref.nara.jp/1751.htm